

「近くへの遠回り」

キュレーター 岡田有美子 + 服部浩之

大抵の国や地域で容易にインターネットへの接続が可能になり、SNSによるカジュアルなコミュニケーションが当たり前になった現在、「遠さ」や「遅さ」を実感することは少なくなり、遠く離れた相手のことを近く感じる場面が多いのではないのでしょうか。「世界が近づいた」現在においても、未だキューバと日本は遠く、インターネットによるコミュニケーションも簡単ではありません。また、社会主義経済を基軸にしたキューバ社会の仕組みは日本社会のそれとは大きく異なっており、お互いの状況を想像することも容易ではありません。しかし、海に隔てられた閉鎖的な環境にある島国という意味では似ているところもあり、グローバル経済に翻弄される同時代に生きる者同士、お互いに意見を交わし価値観を共有する場面も多く、近さや親密さを強烈に感じることもあります。キューバにおいては、インターネットを介した瞬間的なコミュニケーションが簡単ではない分、直接対話することの意味や価値、つまり遠く離れていることの本質的な意味や価値が逆説的によく見えるのかもしれない。

言葉も社会システムも異なる場所に生きる私たちが会おう時、近づきたい、知りたいという欲求が生まれます。サルサやソンに代表されるダンスや音楽、葉巻や野球といった、ステレオタイプなキューバ像だけではない、日々の生活、実感がそこにはあり、もちろん日本にも禅や茶道、野球が中心に回る生活がそこかしこにあるわけではありません。近づきたい、触れたいのは、その像の向こう側にある「何か」であって、しかしそこにたどり着く事は容易ではなく、隔たりのほうに触れるばかり。けれど重要なことは、「近づきたい」という渴望そのものであり、常に核心に近づくことを試みるもうまくいかず失敗する、その連続にあるのではないのでしょうか。

2015年のアメリカ合衆国との国交回復により、キューバへの関心は高まり、訪れる人も爆発的に増えていきます。しかし観光客が増えることによって、物資不足や物価高騰はますます深刻となり、外貨を得られる人とそうでない人との格差はより広がっていると聞きます。日本でも資本主義の浸透による貧富の差など社会的な格差の拡大や、大都市とそれ以外の地方との格差の広がりが深刻です。2011年の東日本大震災のち、エネルギーや資源について再考する機運も生まれ、大都市を離れ多様な地方での生活に価値を見出す動きもありましたが、一方で東京一極集中の動きはますます拡大しています。

差異や多様性を肯定することの重要性が語られながら困難を伴うのは、近づこうとしなければ「遠さ」を認識することが難しいからでしょう。誰もが身近な所にも「遠い」場所を抱えていて、その距離はどうしようもなく離れていくこともあります。この時代において「近い」と錯覚しないでいられる距離にあることは、既に価値あることなのかもしれません。キューバにおいて初めてまとまった形で日本の現代アートを紹介する機会となる本展では、キューバのアーティストたちの作品も同時に紹介します。それによって、互いの「遠さ」を見つめることから出発し、距離を保ちつつも同時に近づこうと試みる複雑さについて、考えをめぐらせる機会となればと思います。そして、隔たりや距離があることで生まれる「近づきたい」という渴望を想像力の源泉として肯定的に捉え、核心へ触れたいが触れられないという「停滞」にも目を向けたいと思います。